美術の窓(67)

古代古典美術の成立—飛鳥・白鳳・天平〔5〕仏教建築における金堂形式の成立(1)

大和文華館館長　吉川逸治

古典的建築様式　古墳時代に、日本の民族建築は鉄工具を用いて、後代の神社建築の祖形や、平城京の切妻屋根に掘立柱の諸殿の祖形を作るところまで発達し、民族的な建築形態と感覚が育成されてきたことは、容易に想像できる。ここで、太い掘立柱に対する畏敬の念のまじった愛着も育ったろう。しかし、さらに新しく導入された仏教建築は、当時の古代東アジア世界の国際様式であった漢代以来のすぐれた中国建築であり、ことに古典的調和を実現したと思われる唐朝様式を範とするものであるから、当時の日本人の建築思考、ひいては人間の公私の生活空間の造形構成についての思考をば、閉鎖的な島国的環境から解放して、大いに世界的視野にたった実例で訓練させて、おのずから新様式をば日本の風土に調和させて、日本的な古典建築を形成させることになるのだった。

この新建築は、太い円柱を列べ立て、桁梁の水平材と結合し、屋根組みを架し、入母屋式や四注式の大きな屋蓋をのせる楣式木造建築だが、構造上でも表現上でも特徴的なのは、円柱と、上にのせられる斗栱であって、斗栱の形式が様式の特徴を決定する要素になるほどである。当初の飛鳥時代の仏教建築は、玉虫厨子の建築細部や、遺跡発掘の結果、北魏時代の雲岡石窟建築の細部表現などを参考に推定し、近年の再現四天王寺の外観などに試みられているが、おそらく、雲斗による三斗式斗栱を用い、人字形割束を挿入し、すべて木材は太く、武骨な感じのものだったろう。雲斗をやめ、簡明な曲線の肘木を用いた三斗組、さらに二手先・三手先組の斗栱組織を整えて、すでに薬師寺の建築で、古典的調和のある様式ができあがっている。つぎの八世紀中ごろの東大寺法華堂では、斗栱が力強さと権威をもった簡潔さをもち、八世紀後半の唐招提寺ではまとまりよい円熟した形態になっている。

金堂の古典形式　仏寺の配置で、金堂が中心となり、塔が付属物の地位にさがるのも、人間主義の古典的配置として当然の結果である。この金堂の建築が、奈良時代に、東大寺のような例外的な大規模な伽藍の場合は別として、唐招提寺金堂にみるように、桁行七間、梁間四間の単層四注屋蓋という形式が定まり、これが和様の金堂建築の典型として、平安時代から鎌倉・室町まで遵守せられることを大岡実氏が指摘されているが、この点も建築における古典的思考の一例として注目すべきことである。薬師寺の金堂は重層の堂々たる建築だったが、各層に裳階を付けて、複数的な複雑な大きさを示し、いかにもまだ模索時代の建築という姿を残していた。それだけ、はつらつたる活動性があって若々しい。けれども、古典様式というものは、ローマのパンテオン神殿内部が示すような、統一的な単一の大形態をめざして典型を作り上げようとするので、いろいろな試みをへて七間四面の金堂典型に到達したのである。この金堂建築の正面・背面の円柱間隔が、巧みに構造上の要請を整理して、中央を広く、隈にゆくにしたがって狭くする具合、また、それにもかかわらず円柱と桁・梁のかこむ壁面がほぼ正方形に近い安定よい形をとるなど、理想形式への努力がうかがわれる。

そして、ここで見逃せないのは、前面梁間一間が吹き放ちの列柱廊になっていることで、後代この重要な特徴は、扉を円柱間に入れてわかりにくくなるが、顕教のすべての金堂形式のうちにうけつがれ、三十三間堂のような長大な仏堂建築にまで、この基本設計が踏襲されている。吹き放ち柱廊というものは、古典建築として重要な要素だったのであろう。それゆえ、後には扉板や戸で閉ざしても、原初のプランの意図を尊重しているのであろう。

（つづく）

（筆者著書「日本の美術1　日本美術入門」監修／亀井勝一郎・高橋誠一郎・田中一松、1966、再版1980年、平凡社、より

本書の英訳本〝Major Themes in Japanese Art〟translated by Armins Nikovskis, 1976, Weatherhill, New York）

唐招提寺金堂の列柱廊

薬師寺東塔

季刊 美のたより No.123
平成10年5月21日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.